

水を飲む

——「水道」研究ノートから——

吉田 司雄

夏目漱石の「それから」(「東京朝日新聞」「大阪朝日新聞」明治四二・六・二七～十・十四)には、次のような会話が記されている。独身の高等遊民で実家とは別に一家を構えている主人公の長井代助のところに、やがて書生として居候することになる門野が始めて訪れた際、二人が交した会話の一部である。

「家へ来る方が好いんですか」

「まあ、左様ですな」

「然し寝て散歩する丈ぢや困る」

「そりや大丈夫です。身体の方は達者ですから。風呂でも何でも汲みます」

「風呂は水道があるから汲まないでも可い」

「ぢや、掃除でもしませう」

この「水道」に関して、現行の岩波書店版『漱石全集』第六卷(一

九九四・五・九)の「注解」(中山和子)はこう説明を加えている。

水道 一戸専用水道。東京市に新水道ができたのは明治三十二年。一戸専用装置のつけられない家庭のためには、共同栓(共同水道)が設けられた。明治四十二年の水道使用戸数は東京市総戸数の約五割。

より正確を期すならば、東京市内で近代水道による通水が始まったのは、明治三十一年。まずこの年の一月に、淀橋浄水場から神田区、日本橋区への通水が開始されたのだ。翌三十一年一月には東京市内全域に給水がなされることになり、一二月一七日に淀橋浄水場で落成式が挙行された。それから十年後の明治四十二年、表1にあるように東京市の現住戸数約四二万に対して、水道使用戸数は約二四万。確かに五割を僅かに越えたに過ぎない。まだまだ多くの人々が共同栓のおかげで水道の恩恵を受けつつも、井戸の水を汲んで風呂

を焚いていた時代であった。この会話中の「水道」と「風呂」の二語は、水道の一戸専用装置を設けた家に住み、さらに水道の蛇口を有する新しい風呂をも作れるという代助の経済的な豊かさを簡潔に指し示している。

日々、この水道の水で嗽^{うがひ}をし、風呂に入り、髪を剃る代助は、作品中で何度となく飲物を口にする人でもある。毎朝の食卓で「熱い紅茶を啜りながら焼麴麴に牛酪を付け」（一の二）るなど、特に水道水を沸かして入れるのだと思われる「紅茶」を愛飲しており、「牛乳配達が空壺を鳴らして急ぎ足に出て行つた」（十の三）ところからは「牛乳」も飲んでいたことが察せられる。久しぶりに会った中学の同窓の平岡と近所の西洋料理屋で酒を飲んだり（二の二）、父親に用があつて実家へ出向いた時、兄の誠吾から勧められて到来物の葡萄酒を洋盞で飲みながら「旨いですね」と呟いたり（九の二）、平岡の家を尋ね夫婦とも留守であつたため、神田の「あるビヤ、ホールへ這入つて、麦酒をぐい／＼飲んだ。」（十一の四）りすることから、代助の食生活は洋風に傾き、アルコールも「葡萄酒」や「麦酒」といった西洋伝来のものを好んでいたことが分かる。平岡や兄と日本酒の盃を重ねたことを表す場面はあるが、作品のクライマックスにおいても普段から愛飲している「キスキーを洋盃で傾け様かと」（十四の八）一時考えてしまう人物なのだ。これは代助の甥の誠太郎が「多くの焼芋屋が俄然として氷水屋に変化するとき、第一番に駆けつけて、汗も出ないのに、氷菓を食ふ」（三の二）子供であり、代助の家に来て「チョコレート」を飲んだり（六の三）、自宅の書生部屋で「白

表1 水道使用戸口表

年別	水道使用戸数	水道使用者推定人口	現住戸数	現住人口
明治32年	16,316	83,212	327,796	1,497,784
33年	48,289	246,274	355,517	1,497,565
34年	62,306	317,760	381,336	1,630,894
35年	151,145	772,351	408,388	1,705,028
36年	156,156	799,519	447,213	1,803,584
37年	168,962	876,994	458,538	1,870,628
38年	175,805	925,578	485,024	1,969,833
39年	193,658	1,016,464	505,241	2,063,828
40年	212,858	1,108,845	522,558	2,146,043
41年	228,369	1,191,413	542,090	2,168,151
42年	241,789	1,254,401	429,127	1,623,079
43年	258,282	1,323,096	466,164	1,805,800

（在留外人は含まれていない）

（『淀橋浄水場史』五六頁）

砂糖を振り掛けた苺を食つてゐた」(十一の六)りすることともつながつているだろう。

やがて代助は、今は平岡の妻となつてゐる三千代と再会し、そこからドラマが起こつてゆくのだが、本稿の関連から見て印象深いのは、彼女が始めて代助の家を「手に大きな白い百合の花を三本許提げて」訪ねて来たその時の場面である。そこには、普段の代助とは対照的な、三千代の姿が描かれている。

「あ、苦しかつた」と云ふながら、代助の方を見て笑つた。代助は手を叩いて水を取り寄せ様とした。三千代は黙つて洋卓の上を指した。其所には代助の食後の嗽をする硝子の洋盃があつた。中に水が二口許残つてゐた。

「奇麗なんでせう」と三千代が聞いた。

(十の四)

しかし、代助は先刻自分が飲んだ残りの水を椀から庭に捨ててしまひ、門野を呼ぶ。だが、容易に返事がないため、少しまごつきながら代助は、「今すぐ持つて来て上げる」と三千代に声をかけ「折角空けた洋盃を其儘洋卓の上に置いたなり、勝手の方へ出て行つた」。そして、茶の間で玉露を入れようとしていた門野を後目に「自分で台所へ出た」。だが、賄いの婆さんが菓子を買ひに出てしまつていたために、門野と「二人で洋盃を探したが一寸見付から」ず、止むなく「代助は水道の栓を振つて湯呑に水を溢らせ」、その湯呑に入れた水道水を三千代に届けようとする。

代助は振り向きもせず、書齋に戻つた。敷居を跨いで、中に這入るや否や三千代の顔を見ると、三千代は先刻代助の置いて行つた洋盃を膝の上に両手で持つてゐた。其洋盃の中には、代助が庭へ空けたと同じ位に水が這入つてゐた。代助は湯呑を持つた儘、茫然として、三千代の前に立つた。

「何うしたんです」と聞いた。三千代は例の通り落ち付いた調子で、

「難有う。もう沢山。今あれを飲んだの。あまり奇麗だつたから」と答へて、リリー、オフ、ゼ、グレーの漬けてある鉢を顧みた。

(十の四)

その日の朝、代助は「大きな鉢へ水を張つて、其中に真白なりり、オフ、ゼ、グレーを茎ごと漬け」ていた(十の二)のであり、三千代が香を嗅いで「毒ぢやない」ことを確かめてから飲んだのは、この大鉢の水であつた。水道の水ではなく、植物の漬かつた水を飲むというこの三千代の行為は、代助が普段嗜む西洋伝来のアルコールを口にとることなく告白を遂行しようとする場面と密やかに通底し合つてゐるように思う。

いよいよ三千代に自分の思いを告げようとする日、今度は代助の方が「大きな白百合の花を沢山買つて」来る。百合の香の立ち籠める部屋で代助は三千代と応対する。

「何か御用なの」と三千代が又尋ねた。代助は又、

「え、」と云つた。双方共何時もの様に軽くは話し得なかつた。代助は酒の力を借りて、己れを語らなければならない様な自分を恥じた。彼は打ち明けるときは、必ず平生の自分でなければならぬものと共に覺悟をして居た。けれども、改たまつて、三千代に對して見ると、始めて、一滴の酒精が恋しくなつた。ひそかに次の間へ立つて、例のキスキーを洋盃で傾け様かと思つたが、遂に其決心に堪えなかつた。

(十四の八)

だが作品終結部で、三千代とのことが原因となつて父親から勘当された代助は、職業探しに外へ飛び出す。「赤い色」のものが幾重にも重なり「仕舞いには世の中が真赤になつた。さうして、代助の頭を中心としてくるり／＼と焰の息を吹いて回転した」と書かれるこの有名なシーンにおいて、焼け焦がされるような状態にある代助にはどれほど喉が乾くとも水を口に含むことは許されてはいまい。

二

家庭の中に「水道」が入つてゆく様は、明治期に女子教育の一貫として行われるようになった家政学の教科書類からも窺ふことができる。日本における家政学の摇篮期のものを見てみると、例えば、明治一四年三月の文部省編輯局から出された『家事要法』¹⁾は、一八七〇年にアメリカで刊行されたビーチャル及ストウ女(C. F. Beecher

& H. B. Stowe) の「プリンスブルス、オフ、ドメスチック、サイアンス」(Principles of Domestic Science) が原本であると序に記されているが、本文中に「水道」に関する具体的記述はない。飲物については、「第十篇 養生法ニ適ヘル飲料」に、「凡ソ婦人ガ一家ヲ治ムルニ学識ト道德トヲ要スルノ条件多シト雖、其最必要ナルハ刺衡力ヲ有テル、飲物ヲ制禁スルノ一事ニ在リトス」として、「アルコホル」性飲料阿片混和物及煙草の危険を述べることが主となっている。「浄水ハ十分ニ健康ニ益アリ」との言があつても、そこから「水」自体の話へと進んではいけない。日本において近代水道布設の計画さえ十分にたつていない時期であるから、当然と言えば当然と言えるだろう。

それが、明治一三年七月二日に金港堂から出版された清水文之輔『家政学』²⁾になると、詳細な「水」に関する記述が出てくる。「第八章 滋養なる飲料 (Healthful Drink) では、(一) 水の種類。」で柔水 (Soft water) 、硬水 (Hard water) 、石炭水 (Limestone water) 、砂水 (Sand water) 、沼水 (Marsh water) 、川水 (River water) 、海水 (Sea water) の違を述べ、「(三) 不清水の成果。」では悪水が原因で起る疾病を、食滯 (Dyspepsia) 、下痢 (Diarrhoea) 、赤痢 (Dysentery) 、虎列刺 (Cholera) 、熱病 (Fever) 、瘤 (Goitre) の順に説明、さらに予防のために「(四) 清水法。」として蒸留 (Distillation) 、沸騰 (Boiling) 、氷結 (Freezing) 、濾水法 (Filtration) の仕方が書かれている。明治一〇年代から二〇年代にかけては、コレラなどの伝染病の蔓延と患者死者の増大が社会問題になっていた。特に東京では明治一九年にコ

レラ患者一二一七一人、死者九八七九人を数えたという。このコレラ大流行が要因となつて、明治二十一年八月一七日に東京市区改正条例が公布、一〇月から内務省の東京市区改正委員会が上水改良を緊急調査にあつたことから、東京における上水改良のための調査と水道設計案の検討が本格化してゆく。そして先述したように、明治三十一年一月から神田区、日本橋区への通水が開始され、翌三十二年一月からは東京市内全域にも給水がなされることとなつたのである。

こうした状況に対応し、家政学教科書でも明治三〇年代に入ると、「水道」に関する記述が登場することとなる。例えば、明治三十一年三月に東京の成美堂、目黒書房から出された後関菊野、佐方鎮子合著『家事教科書³⁾』では、「第二章 衛生」に「水の人体に於ける効用は甚だ大なるものなれば其質の良否に注意を加ふること特に肝要なり」との言が置かれ、まずはここでも軟水、硬水、雨水、河水、海水、池水の違いが説明されている。だが、注目すべきなのは、ではどの水が衛生的なのかという説明として、「水の種類及び性質右の如くなるを以て即ち日用飲料に供して最も安全なるものは堀抜井戸及び水道にして之に次ぐものは高地の堀井戸なり」とあることだろう。とはいえ、まさにこの年から通水開始した東京の上水道であるが、通水開始日の十一月一日から一五日に給水工事をしたものは、一一〇一三戸であつた⁴⁾。先の表1にあるように、翌明治三二年段階での水道使用戸数はわずか一六三一六件、現住戸数三二七七九六件のわずか五%に過ぎなかつた。「水道」ではなく「堀抜井戸」や「堀井戸」の

方がずっと一般的であり、その安全性が何より問題だったのである。

それが明治三八年一二月に東京の参文舎、大阪の積文社から出された塚本はま子講述『実践家政学講義⁵⁾』になると、生活改善の必要条件として「水道」が強調されてくる。「第三講 生活」では「空気の清潔に対して飲料水の良い土地を撰ぶことが第一であります。依然にも一寸申して置きましたが、大都會の裡には堀井の水の良いのは誠に稀で、如何しても完全な鉄管に依つて引いた水道の水のある処が宜いので御座います。」と述べられ、それでも「堀井の水を飲料水のとしなければならぬ場合の条件」が補足的に記されることとなる。そして、「私共が一寸拝見た所で、水の性質を判断することは、容易なことで御座いませぬから、如何しても衛生局などで試験を受けた方が宜からうと存じます。此試験に依つて仮令良水と定つても、矢張年に一回、又はは少くとも三年目には一度位は試験して貰はねばなりません。」との説明が加えられるのだが、逆に言えば、この時期になると「水道」の安全性はもはや自明のものとして家政学教科書レベルでは認知されるに至つたと言つていいだろう。

「それから」の三千代が水道水が来るのを待切れずに植物を漬けた大鉢の水を飲む場面の衝撃力は、近代水道の普及と安全性の確立とを担保になされたものだったのである。

三

夏目漱石「門」(「東京朝日新聞」「大阪朝日新聞」明治四三・三・

一六・一二の主人公である、宗助と御米夫婦の家の台所にも「水道」が引かれている。「廂に逼る様な勾配の崖が、緑鼻から聳えてゐるので、朝の内は当つて然るべき筈の日も容易に影を落とさない」という崖下の借家に住む二人の生活水準は、「それから」の代助とは大きな懸隔がある。実際、自宅の水道付の風呂にいつでも入れる代助に対し、宗助は「役所が退けて、家に帰つてから」「丁度人の立て込む夕飯前の黄昏」に銭湯まで出向かなければならない。だが宗助は、「稍ともすると三日も四日も丸で銭湯の敷居を跨がずに過して仕舞ふ」。それでせめて「日曜になつたら、朝早く起きて何よりも第一に奇麗な湯に首丈浸つて見様」と常々考えながらも、結局日曜には寝坊して朝湯に行けなくなってしまう生活を繰り返している。

それでも明治四〇年代には、役所勤めのサラリーマン生活をしている宗助の家の台所まで専用水道が通じるようになってきたのだ。当初は水道料金と工事費とで出費がかさむため申込者は多くなかった新水道ではあるが、旧水道の水質悪化が進む一方であったため、雨の日でも衛生的な水を飲める新水道は徐々に普及し、自宅内の適当な場所に水道鉄管から細い管を引いた専用栓で水道水を使用する家が増えつつあった。依然水道使用戸数は現住戸数の約半分、総人口の三分の二に留まっていたが、実際に専用栓で水道を使用できる便利さは大きく、表2から分かるように一人当たりの消費量が著しく増えていった。

宗助と御米の家でも「水道」は欠かせないものとなっている。「御米は台所で、今年も去年の様に水道の栓が氷つて呉れなければ助か

るがと、暮から春へ掛けての取越苦勞をした」。こんな「取越苦勞」をするのが、どの家庭でもあたりまえだったわけではない。だが、ひとたび台所まで引かれた水道の恩恵に預った人々にとっては、この御米の「取越苦勞」は我が事でもあったであらう。

表2 一日最大給水量と給水人口

年次	一日最大給水量	給水人口
明治40年	6,660,240立方尺	1,097,329人
41年	7,601,040	1,172,502
42年	8,365,306	1,234,971
43年	8,181,370	1,309,731
44年	8,922,203	1,383,518
45年	8,696,356	1,440,155

(『淀橋浄水場史』五九頁)

年の暮のある日、「水道税の事で一寸聞き合せる必要が生じたので、宗助は帰り路に坂井へ寄った。坂井というのは、崖下にある宗助の家の大家である。ここに記された「水道税」については、現行の岩波書店版『漱石全集』第六卷（一九九四・五・九）の「注解」（石井和夫）では、この様に注記されている。

水道税 これまで東京市の水道料金は一戸五人までは年額五円、一人増すごとに五十銭を追加していたが、家族数を偽る者もあつたので、これを改正して屋敷坪数によつて徴収する論が行なわれていた。

役所帰りの宗助をわざわざ崖上の坂井の家に立ち寄らせるきつかけが、公的な「水道税」の話題だったというのは、極めて象徴的だ。「自分と関係のない大きな世間の活動に否応なしに捲き込まれて、已を得ず年を越さなければならぬ人の如くに感じ」ている俸給生活者の宗助には「水道税」にも相應の心理的負担を感じていたのかも知れない。浄水場を起点とする水道鉄管のネットワークが個々の家庭の内部にまで通じるようになり、台所の専用栓をひねれば誰もが衛生的で等質の水を口にできる時代、それはかつての代助のような高等遊民ならばともかく宗助と御米夫婦のような生活レベルの人々にとっては、便利さと同時に様々な負担をももたらしたものであったのである。

【註】

- (1) 田中ちた子、田中初夫編集『家政学文献集成 続編 明治期Ⅱ』（一九六九・六・一五、渡辺書房）に収録
- (2) 田中ちた子、田中初夫編集『家政学文献集成 続編 明治期Ⅳ』（一九七〇・一・一五、渡辺書房）に収録
- (3) 田中ちた子、田中初夫編集『家政学文献集成 続編 明治期Ⅷ』（一九七〇・七・一五、渡辺書房）に収録
- (4) 『淀橋浄水場史』（一九六六・三・三一、東京都水道局）五六頁
- (5) (4) に同じ

【付記】

本稿は、拙稿「帝都の「水」が変わるとき——「水道」言説の形成」（小森陽一、紅野謙介、高橋修編『メディア・表象・イデオロギー——明治三十年代の文化研究』、一九九七・五・三〇、小沢書店、及び「明治三一年、淀橋浄水場完成。」（『東京人』一三五号「特集「水と歩く東京」」近代水道の百年」、一九九八・一二）の補論であり、二〇〇〇年度秋期開講、工学院大学公開講座「淀橋浄水場物語——「水道」をめぐる文化研究」（二〇〇〇・一一・四、工学院大学新宿キャンパス）で話した内容とも一部重なっている。

（本学助教授）